

ON AIR

NO. **107**

放送大学通信 オン・エア

発行月 2012年9月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2-11
043-276-5111 (総合受付)



CONTENTS

アクションプラン2012について	1
もう一度みたい名講義アーカイブス	3
コース別座談会	4
特集:東日本大震災から1年半	8
研究室だより	11
叢書感想文コンクール	12
2012年度開設改訂科目紹介	14
学習センターだより	18
学園ニュース	19
インフォメーション	20

アクション・プラン2012 について

放送大学アクション・プラン2012が、発行されました。アクション・プランとは、放送大学の中期的な将来ビジョンを示すものです。今回、策定されたアクション・プラン2012について、岡部学長に語っていただきました。



岡部学長 放送大学は2013年度でちょうど創立30周年を迎えるんですね。だんだん教育が情報化してきているとか、色々な意味で見直しの時期になりつつあると思います。それを意識しながら2つのマスタープランとして、大きくどんな柱を立てていくのかということ、それから、10の具体的なアクション・プラン。これは2つのマスタープランをベースに具体的にこんなことやりたい、あんなことをやりたいと策定したプラン、そういうもので構成されています。

—マスタープランのうちで、1つめは「卓越した教育型大学を目指す」ですが、これはどういうことを目指すのでしょうか。



岡部学長 1つはオープン、オープンユニバーシティというんですね、普通は入学が公開されている、つまり誰でも入れるという意味なんですね。最近もう1つオープンという言葉が流行るようになってきて、オープンエデュケー

ショナルリソースという言葉があります。

これは、教育内容を公開しているということなんです。放送大学は、元々授業をテレビやラジオで放送しています。放送大学は2つのオープンをすでに最初から持っていますので、それを強みにして、卓越した教育型の大学を目指そうというのが1つの柱です。

—2つめのマスタープランなんですが「多様な学生の多様なニーズに応える」これはどういうことになるのでしょうか。

岡部学長 そうですね、具体的なアクション・プランの中でだんだん見えてくるとは思いますけれど、多様な学生の皆さんが放送大学には入ってくる訳です。例えば、年齢にすごくバリエーションが多いとかですね、普通の大学だとなかなか通えないような人、学ぶニーズも非常に多様であると、その様なニーズになるべくきちんと応えていこうというのが2本目の柱ですね。

—この「2つのマスタープラン」をより具体的に記したのが「10のアクション・プラン」です。10のア

クション・プランをいくつかご紹介いただけますか。1番目の「カリキュラムの改善」についてお願いします。

岡部学長 「カリキュラムの改善」は、いくつかありますが、大きなものを挙げますと、2013年度から教養学部情報

コースを、大学院に情報学プログラムをと、情報系の分野を追加するというのが大きな柱の1つです。もう1つは、授業科目の科目名が、よく言えば分かりやすい、悪く言うと何の話をするか聞いてみないと分からないという科目も中にはあるんですね。少しその辺に対して反省がありまして、もう少し科目全体の体系を整理しながら、その体系のどこにその科目が位置されるかということ、学生の皆さんにとってもっと見やすくしようという努力を始めています。

—では、2番目の「よりよい教材の提供」についてはいかがでしょう。

岡部学長 これは、テレビ・ラジオで放送している放送教材と印刷教材があります。今も平均的には評価は高いんですけど、なかには聞きづらい科目とか、色々ありますので、少しでも学生の皆さんにとって聞きやすくすること、それから教材の質を上げていくことが2番目のポイントです。

—3番目は「電子媒体による学習支援の充実」です。

岡部学長 電子媒体という言葉から分かるように、Web学習システム通信指導や授業科目のネット配信など、インターネットを利用した学習システムを今もどんどん拡充していますが、もっと充実していきましようという話です。特に私が個人的に関心を持っているのは、通信制大学の欠点である単方向性と言いますか、一方向的なものを学生の皆さんから教師にも働きかけができるような、「双方向的」なものにしていこうというのが1つの目標です。ただ、放送大学はかなり年齢の高い方もいらっしゃるから、それこそ多様な学生さんがいらっしゃる訳ですから、インターネットとかパソコンはあまり慣れていませんという方もおられるかもしれませんね。そういう方々に対して、面接授業「初歩からのパソコン」を各地でやっています。インターネットに対する基礎



力を上げて、学習を充実させていただくことですね。

—4番目に「新しい教育手法の蓄積と再利用」です。

岡部学長 これは学生さんというよりはむしろ先生方に対するアクションプランなんです。先生方も色々と工夫され

て良い教育をしようとしていらっしゃるんですが、それは多くの場合、どこの大学でもその先生一人で終わってしまうんですね。なんとかして他の先生に伝授していけないだろうか、ということを考えています。色々その手法を「ティップス」って僕らはいうんですけども、ちょっとしたヒントみたいなものを集めてどんどん蓄積して行って、後の先生がそれを見て、「私もこうすればいいんだな」とわかるようにしようという、その様なイメージです。

—具体的なアクションプランは、冊子をご覧ください。それでは最後に、学生の皆さんへ向けてメッセージをお願いします。

岡部学長 アクション・プランで示しているのは基本的には、大学をもっと良くして行って、学生の皆さんにとって使いやすいものにしていきたいということです。それを引き続きどんどん進めていきたいと思っています。それには我々、学長や副学長が頑張るだけではとてもできません。やはり学生の皆さんたちの応援というのが、どうしても必要なんです。ということで是非応援して頂いて大学の改革が進むようにして頂けると嬉しいなと思います。一緒になっていい大学を作って行こうじゃありませんかというのが、私からのメッセージです。

(聞き手は鷹鷲アナウンサーでした)

このインタビューの様子は、ホームページの大学の窓で配信しています。アクション・プラン2012は、ホームページでご覧いただけます。また、各学習センターで配布しています。ぜひご覧ください。

放送大学 検索 www.ouj.ac.jp

大学の窓

<http://www.ouj.ac.jp/hp/eizou/mado/>

アクション・プラン2012

<http://www.ouj.ac.jp/hp/gaiyo/actionplan.html>



もう一度みたい名講義～

放送大学アーカイブス

附属図書館長 松村 祥子



2013年に開学30周年を迎える放送大学のすべての科目の放送教材と印刷教材が、附属図書館に保管されています。放送大学のように全講義の完全な記録をもっているところは、日本だけでなく世界の他大学にも殆どありません。

「放送大学十年史」によると、放送教材は開学当初からチーム体制で制作されてきたようです。各科目ごとに編成された主任講師、関連する分野の教員、出演講師及びディレクターによる協力チームが一体となって講義を作るという体制は現在にも引き継がれています。一流の講師と優れた制作スタッフによる高水準の講義を提供するという目標の下で、多くの名講義が生み出され、放送大学の財産として蓄積されてきました。

「もう一度みたい名講義」は、2000科目をこえる放送教材(テレビ・ラジオ)の中からテレビ科目を取りあげて再編集したものです。2011年度には25番組が制作され、現在も放送中です。「生活と芸術」「基礎物理学」「近代経済思想」「日本文化史」「音楽史と音楽理論」など幅広い分野の講義があります。名講義の放送は、学生に評判が良いだけでなく、他大学の教員や一般視聴者からも賞賛されています。

「どのようにして、名講義シリーズの対象科目を選んだのか?」とよく聞かれます。確かに名講義の定義はないし、どの講義が名講義なのかを厳格な基準で選んだわけではありません。ただ、2010年度に「アーカイブス選考委員会」をつくり、放送大学発足当時の科目作成経過と学生の反応等を知っている教員が集まり、講義リストの中から評価の高かった科目を選びました。2011年度には「告知番組委員会のワーキンググループ」で同様の選考を

しました。

2011年10月1日には、BSデジタル放送開始番

組の一つとして、「今、よみがえる名講義」が放送されました。これは名講義シリーズを紹介する番組で、名講義の中の名場面の紹介、関係者が語る思い出、そして名講義シリーズの意義等を伝えています。放送大学の実験放送にも携わった河村陽子さんが案内人になり、附属図書館の保管庫を見せたり、「住居学」の主任講師だった故清家清先生の「私の家」を訪ねて、ご子息である清家篤慶應義塾長にインタビュー等を行っていますので、再放送の折にはぜひご覧下さい。

2012年度も引き続き「名講義シリーズ」制作を予定しています。「記号と人間」、「フランスの言語文化」、「社会調査」など10科目です。特に今年度は、1985年から1992年度に開設された科目を取りあげています。これには、理由があります。新しい年次の開設科目に名講義がないのではなく、1992年以前の科目制作に使われた1インチテープの再生が機械の都合で今後難しくなるという事情があるのです。

技術の進歩は超スピーディに便利な新しいものを生み出していきますが、20年前のテープすら再生できなくなるのは残念です。放送大学初期の頃のテープが再生不能になる前にできるだけ再録しておく必要があるということで、2012年度は初期の科目を対象にしています。名講義シリーズを見て頂いた方から熱い感想が寄せられていますように、時代が変わっても変わらない価値が、講義の内容、形式そして収録の仕方にも見られます。

これからも放送される「名講義シリーズ」をできるだけ多くの方に見て頂きたいと願っています。また放送大学の全講義が保管されており、見ることのできる環境を維持することは、日本のみならず世界の大学教育の歴史上、大きな意義があります。名講義は個人技だけでなく、教育を重視する大学の姿勢と協力体制から生み出されるものだと思います。

今後の放送予定は、大学ホームページの特別番組ガイドか番組案内でご確認ください。



今求められる 「学び」とは



放送大学には、学位取得やキャリアアップ、自己実現などさまざまな目的から生涯学習を目指して多様な方々が学ばれています。そこで、今回のコース別座談会は、心理と教育コースの4人の先生方にお集まりいただき、「今求められる『学び』とは」というテーマでお話いただきました。※本文中は敬称略とさせていただきます。

コーディネーター

岡崎 友典 准教授（地域教育社会学・地域教育論）

岩永 雅也 教授（生涯学習論・教育社会学）

小川 正人 教授（教育政策・教育行政学）

星 薫 准教授（認知心理学・発達心理学）



生涯学習の変遷 —教育から学習へ



岡崎 今回は、現代社会における教育の意味、とりわけ生涯学習の果たす役割といったものについて、さらに今「学び」はどうあるべきか、といった点まで話を進められたら、と思います。生涯学習論・教育社会学がご専門の岩永先生、口火を切っていただけますか。

岩永 まず教育、生涯学習を巡る変遷について簡単に俯瞰してみましょう。戦後～現代は大きく二つの時期に分けられます。まず高度成長期—がむしゃらに働きがむしゃらに生産することによって生活が向上した時代です。当時はまず、教育専用の時間が子どもたちに与えられ、その間子どもたちはひたすら勉強しました。そして卒業すると実社会に入り、専ら生産の担い手として仕事だけをする。こういう生産プロセスから分離された、フロントエンド型と言いますが、そういう教育システムが作り上げられました。効率よく学び、効率よく生産する。それは大量生産大量消費の時代にぴったりと合った教育形態でした。ところが80年代辺りを



岩永 雅也 教授

境に、大量生産大量消費では社会全体が立ち行かなくなると、教育のあり方も見直されるようになります。その少し前、60年代には生涯学習という考え方がヨーロッパからもたらされていました。この生涯学習という新しい概念は、80年代辺りまでは政策として国によって提起させられた側面もありましたが、その後30年を経て成熟し、私たちの生活実態に合うものになったと言われます。紆余曲折の末に…でも本当にそうなんだろうか、これが私たちの求めていた生涯学習なんだろうか…、それを見直すべき時期に私たちはいるように思います。

岡崎 近代以降は教育＝学校というイメージで捉えられてきました。学校教育が社会の発展に寄与してきた、といった言い方をします。結果、60年代には全国民を巻き込むかたちでの学歴社会が出現します。一方で、学習は学校だけのものじゃない、社会に出てからも学べるんだよといった、リカレント型の教育—生涯教育が盛んに提唱されるようになります。

岩永 80年代までは社会教育と呼ばれていました。ところが、上から教育するのはおかしい、という“社会教育終焉論”というものが出てきて、その辺りを潮目に「学び」の本質が、教育から学習へ、と

変わっていったような気がします。成人は教えられるものではなく学ぶ存在である、と。

岡崎 小川先生は教育行政や学校現場にお詳しいですが、教育から学習へ、についてどうお考えですか。



小川 正人 教授

小川 教育から学習へ、社会教育から生涯学習へと意識した国の政策転換があったのは事実です。加えて言えば、当時、社会教育というものは、その専門家である社会教育主事が地域の課題解決のために地域住民の

学習を組織するという専門家主導型のものでした。

が、それはおかしい、むしろ住民一人ひとりが主体となって学習すべきだという、教育から学習への流れを促した気運が生まれます。一方で、では住民が主体となって自由に学習すればよい、というのではあまりに楽観的すぎないかという懸念もあり、最近、社会教育の復権が叫ばれ始めています。これと同様のことが学校の中でも起きました。それは、ゆとり教育への転換です。それまで学校では基礎・基本をきっちり教え込むという考え方が強かったのですが、それでは意欲・判断力・思考力が育たない。それらを育てるために子どもが主体となる「学び」をどう作っていくかという議論をゆとり教育は起こしたのです。ただその成果については否定的な見方が多く、基礎・基本をきっちり教え込む教育の機能と子どもが主体的に学ぶ学習の機能を学校の中でどう整合させていくか、が今まさに現場で問われている課題です。

岡崎 社会教育の領域でも学校教育の領域でも、学習か教育かの議論が起きている訳ですが、それは二者択一ではありません。教育は学習を前提にしたものです。学生の方から教育と学習の違いについて聞かれ、「教育とは学習を指導すること、ないしは指導された学習のこと」と申しあげています。指導というと、成人の方には抵抗があるでしょうから支援とか助言とかに言い替えても構いませんが、この変動の激しい社会にあっては学ぶ人が主体的に学びたいものだけを学ぶだけでは不十分で、もっと幅広い「学び」が必要です。また、個人の学習はムラとム

ダに陥りやすい。そうならないよう指導する、広く学ぶためのカリキュラムを組むよう助言する、それは教育の役割であると考えています。

「学び」の機会について—— 「後期子ども期」、そして学び直し



小川 70～80年代まで極めて良好な社会経済と教育のありようを背景として、製造業を中心に多くの中間層を生み出してきました。学校で基礎・基本を学び学歴を積みれば将来が約束される、そんな時代でした。ところが80年代以降、産業構造が大きく変わり、グローバル化のもと製造業はどんどん海外に出て、国内雇用は減少の一途です。ここ10数年の海外移転で失われた国内雇用は300万とも400万とも言われています。失業率は若年層に限ると10%超です。かつて企業内教育で能力開発を行っていた企業もその余裕はなく、中途採用へと舵を切っています。そういう社会情勢・雇用不安が若い人を覆っている中であって、今「後期子ども期」という言葉が福祉や社会保障といった言葉を伴いさまざまな分野で使われるようになりました。教育分野でも、概ね22歳で終わっていた教育の仕組みを30歳ぐらいまで見据えたものにしようという文脈で語られています。私が担当する学生の方は、2つの大学を出てもなお、社会に出ていくための確かなものを学びたいと放送大学に通われています。まさに「後期子ども期」を想起させる学習の場として放送大学は機能しているのだと感じます。

星 そのことは、人の寿命が長くなったこととも関係していると思います。昔は55歳あるいは60歳の定年年齢と人生終焉の時期とはさほど離れていませんでした。ところが、今は80歳、90歳まで生きるとは当たり前です。特に女性の場合、子どもが巣立ってからの時間が3、40年はある。そういう長期化した人生プロセスから考えると、「後期子ども期」は自然な成り行きと言えます。世界的にも、先進国では30歳ぐらいまで学生生活を続けている例が数多く見



星 薫 准教授

られます。つまり本格的に仕事に就くとか家庭を持つといった“大人の仕事”を30歳過ぎまで先送りすることは、さほど珍しいことではなくなっているのです。この長期化した人生プロセスは、40代、50代の女性にも転機をもたらしました。もう一度学習してみたい、もっと多くの知識を得たい、という学び直しです。その背景にも教育が絡んでいます。男女平等の教育を受けてずっとやってきた彼女たちですが、学び終え社会に出た途端、女性は男女の違いを意識させられます。企業によっては子どものいる女性は望ましくないとか、子どもを預けるべき保育所が足りないとか、学校では教わらなかった、女性独特の負荷や社会矛盾にはじめて直面する訳です。でも人生は長い。そういう女性の方の学び直しへの意欲はとても強いですね。

岩永 星先生がご専門の心理学では、エリクソンやハヴィガーストが提唱した、発達段階に応じた課題をクリアしながら人は生涯発達していくという「生涯発達」という考え方があると思うのですが、その根拠になったのは男性の発達ですね。そういう時代だったということでしょうが、翻って今の女性はどうかと考えると、男性よりずっと課題が多い気がします。男性は、次は高校、次は大学、次は就職、今課長なら次は部長、そして退職、という流れに乗っていきますが、女性は人生の節目節目で男性とは違う高い壁、複雑なハードルがあるように思います。その分、勉強したいという欲求の素となるものが女性には豊富にあるように思いますが、いかがでしょう。

星 おっしゃる通りだと思います。実際、放送大学で卒業研究や修士論文のテーマを見ていると、女性たちのテーマはとても多様で柔軟な発想をされています。そういう壁やハードルが多いからこそなのかもしれません。昔、アメリカで行われたライフスタイルに関する調査でも、30歳ぐらいまでに築き上げたライフスタイルが、男性は70歳、80歳とずっと継続するのに対し、女性は中年期、老年期でがらりと変わってしまう人が数多くあるのです。それに付随して生活満足度とか幸福感も大きく変わっていきます。ですから若い女性の40年後なんて予想がつかないんです。男性はだいたい予想はつきませんが…(笑)。

もう一つの生涯学習



岡崎 中・高卒後の若年層に無業者の多い沖縄について調べましたが、家族や地域の共同体が若い人を見守る、一緒になって将来を模索する、といった姿が浮き彫りになりました。沖縄独特の文化・風土に裏打ちさ



岡崎 友典 准教授

れた教育観と言ってよいかも知れません。本土でも若年層の就職には厳しいものがありますが、就職しても3年程で辞める人も多いと聞きます。そういうことと全く批判的になりがちですが、地域で見守り、社会で育てる、本人たちも自ら育って行く、といった視点が求められるのではと「後期子ども期」の話の伺って思いました。小川先生、そういうことからすると学校で行われている進路指導というものは旧来のままではありませんか。

小川 産業構造の転換が若年雇用に影響をもたらしているという話をさきほどしましたが、そうなる当然求められる能力も違ってきます。昔は基礎・基本をベースにした学習が将来を約束する透明感のある社会でしたが、今は違います。ますます不透明となる中で求められる能力とは何か。実は成功者事例を研究して、知識とか技能とかの優越に成功の要因があったのではなく、人生に対する積極的な価値観、意欲といったものがキーとなっていることが分かってきました。そういうものがあってはじめて基礎・基本は活かされる。それは今重要視されているPISA型学力（「生きる力」的学力）にも通じます。学校現場でもそういったものをかなり意識して能力開発や進路指導を行っていくべきでしょう。これは大学など高等教育機関も無縁ではられません。中でも大学院に来られる方は、人生への前向きな姿勢があるが故に職場や地域の課題と格闘しながらいらしているので、教育や開発する能力を再考し、そこに相応しいシステムやカリキュラムを吟味する必要があります。

岩永 大学院の学習は、確かに職業的なものと不可分で、職業上の課題を解決したり将来の展望を求め

て専門を極めたい、といったことが動機になります
が、私は常々「もう一つの生涯学習」があるのでは
ないかと考えています。仕事のためとかではない、
知ることが心地よいといった生涯学習もあるのでは
ないか、と。フロントエンド型の教育はねじ巻き型
で、巻ける所まで巻いてそのほどこける力で行ける所
まで行こうというものです。リカレント型は、途中
でネジをもう一度巻こうというもの。「もう一つの
生涯学習」というのは、ネジを巻いて動くための
ものではない。「何かのために学ぶ」のではなく「学
ぶために学ぶ」という自己実現型の“大人の学習”
だと思います。それは、何か穴を穿つような学習で
はなく、例えば環境から入って、化学、次は生物、
医療、保健、福祉…と巡って再び環境に戻るとい
うような、どこが到達点か分からない「知」の旅とい
ったものです。実際にそういう勉強の仕方をされる
方が放送大学には多く、こちらが学ばされることも
多いですね。

岡崎 地域で「子ども見守り隊」とか「スクールガ
ード」といった学校安全ボランティアに参加する人
が増えています。長い人生、だからリタイヤ後に地
域での人間関係を深めて生活をより豊かなものに、
と考える人が多いことの現れです。他方、これまで
企業戦士として頑張ってきた男性の中には地域にと
けこむ技能をお持ちでなく尻込みされる方もいらっ
しゃる。そういう方にこそ「もう一つの生涯学習」
は有効かな、と思います。「知」を広めることはさ
まざまな職種の方々との出会いのきっかけになりま
す。共通の話題を持つことができます。つまり「生
活を豊かにする生涯学習」でもある訳です。「学
び」を通して自分を高める、それがないと人は孤立
しがちです。文献や映像を通してでもいい。学び続
けることの意義、ですね。

小川 その「自己実現型の生涯学習」はいちばん贅
沢な「学び」だと思います。放送大学に来て5年
になりますが、課題解決のための学習にとどまら
ない、それ以上のものを多くの学生の方が求めている
ことに驚かされます。岩永先生と博士課程設置の準
備のためにアンケート調査を行いました。他の大
学であれば「キャリアアップのため」という希望が
多いはずなのに「もっと知りたい」「専門性を深め

たい」とか、自らの学習をアカデミックな研究に結
びつけて捉えたいとする姿が印象的でした。

星 それは私もひしひしと感じています。現代人は
人生が長いのでリタイヤしたからといって成長を止
める訳にはいかないのです。子ども時代は親や先生
に助けてもらいましたが、今度は自分で自分を成長
させないといけません。そんな前向きで広い視野か
ら学習されている方々が放送大学には多くいらっ
しゃいますね。そういう姿勢とさきほど小川先生がお
っしゃった成功者の人生に対する態度についてのお
話は通じると思いますが、人生に対する意欲、前向
きさといったものを育てる場は学校よりむしろ、家
庭に求められるように思います。そこで中心的な役
割を担うのが父親だと思うのですが、今日の父親
が、その役割を十分果たしているかという疑問で
す。もう少し、人生観を背中で語れるような父親で
あってほしい…。

岩永 私たちのことですね(笑)。先ほどネジ巻き
型と自己実現型の二つの生涯学習の話をしました
が、放送大学でその二つをわきまえて教育を提供し
てきたか、と問われると内心忸怩たる思いです。さ
らに、最近思うのは、脳の働きです。人間の脳は外
から新しい感覚情報が入ると古い情報との関連性を
通して理解しようとしています。子どもの場合は、倉庫
に空きが十分あるため無条件にどんどん吸収しま
すが、成人の場合、たっぷりある知識や経験との整合
性がない場合、排除してしまう嫌いがあります。無
意識にです。そういうことも意識しながら、講義で
行う論理の展開の仕方、教材の作り方などに工夫が
必要なのではと自戒を込めて考えています。

岡崎 成人学習の特性を踏まえた上で、教育を提供
していかなければならないというお話ですね。さ
て、時間が来てしまいました。長い人生の話もあり
ました。男女の違いもありました。が、「学び」を
続けることの重要性が語られたように思います。私
たちの話が、学生の方々がもう一度「学
び」について見つめな
おす契機となれば幸い
です。本日はありがと
うございました。



特集

東日本大震災から1年半

2011年3月11日の東日本大震災発生から約1年半経ちました。被災地域である岩手学習センター、宮城学習センターの所長に、当時の状況や現在の様子、学習センターや所属する学生の方たちのことをうかがいました。また、放送大学大学院臨床心理プログラム修了生で、現在は臨床心理士としてご活躍されている方が被災地域で行った、ボランティア活動のレポートもお届けします。

一年余を振り返って

宮城学習センター所長 原 純輔



昨年3月11日の巨大地震・津波の発生以来、大学本部、東北大学はもとより、本当に多くの方々のお世話になった。理事長、学長をはじめ、各地の学習センター所長に宮城学習センターを訪問して励ましていただいた。多くの学習センターの学生の皆さんから義捐金や寄せ書きをいただいたりした。ボランティア活動の帰りに立ち寄って下さった学生さんもある。

宮城学習センターは旧制東北帝国大学理学部元生物学教室である(その前は、陸軍の監獄があったことを最近知った)。誰もが経験したことのない激しい揺れにもかかわらず、分厚いコンクリートで塗り固められた1923年(大正12年。関東大震災の年)建造の建物自体は、ほとんど無傷だった。どんなに強い地震でもまず壊れることはない、という確信が得られたのは収穫だった。それでも、災害時の対応はどうあるべきなのか、センター内の片付けが一段落したところで、教職員全員による相談の会合をもち、以下のようなことを決めて実行した。

- ① 学生の避難方法を全員で確認し、面接授業講師や学生にも周知する(別掲ポスター)。
- ② 設備(水道・ガス元栓や電気ブレーカーなど)の場所と緊急措置方法を全員で確認し、練習する。
- ③ 最も頑健な緊急連絡手段



であることがわかった携帯メールについて、全員のアドレス簿を作成して所長・事務長が管理する。④ 帰宅不能学生を長期間世話することは難しいので、指定避難所に誘導することにして場所と経路を確認する。⑤ 非常口の新設を東北大学に要請する(実現)。

震災からしばらく経ち、やや落ち着きを取り戻したと思われる6月頃から力を入れたのは、学生との懇談会である。客員教員と同窓会の協力も得て、恒例の学習センター(仙台市)でだけではなく、再視聴施設のある角田市と石巻市、最も激しい揺れに襲われた大崎市にも出掛けて開催した。ただ、同じく再視聴施設のある気仙沼市については、場所を確保することさえ難しく、断念した(本年6月30日に開催)。

懇談会で一様に訴えられたのは、「勉強しなければ」と思って教科書を開いたり、テレビの前に座ったりしても、集中できない」という悩みであった。「これだけはと思う一科目を決めて、単位取得を目指すことから始めてはどうですか」と答えるようにしているが、果たして回答になっているかどうか、自信はない。

もちろん、懇談会での話題の中心は「あの日あのとき」の体験である。被災の形は本当にさまざまであり、それぞれが強烈であった。それだけに、勉学の忠告も上滑りの感を免れないのである。こういう体験について聞いてもよいものかどうか、最初は迷ったのだが、語りながら各自が再生のストーリーを構築して行くのではないか、と思うようになった。

時間の経過とともに、語りたことがらも悩みも変わって行くだらう。それぞれの人たちの心に寄り添いながら、今年は客員教員によるミニ講義なども交えつつ、懇談会を続けて行きたいと考えている。



“津波被災地”を 見に来てください

岩手学習センター所長 齋藤 徳美



東日本大震災から1年4ヶ月、あっという間に時間が過ぎた。岩手学習センターのある盛岡市は、幸いにして地震動による被害は少なく、学習センターにはいつものように学生さんが学びに訪れ、通常の活動が行われている。沿岸地域で被災した学生さんもいるが、学ぶ意欲は持ち続けられており、頭が下がる想いである。また、いくつかの学習センターからは、寄せ書きなど多くの励ましを頂戴した。改めて感謝の意を表したい。

一方、盛岡市から車で2時間、北上山地を越えると、いまだコンクリートの土台のみの広大な更地が広がる。市街地が壊滅的な被害を被った、陸前高田市、大槌町、山田町、宮古市田老地区などは、瓦礫を移動しただけで、解体のままならぬ建物が点在するのみである。復興は、まるで進んでいないのである。

岩手県の「津波復興計画」の素案を検討する「総合企画専門委員会」委員長として筆者がこだわったのは、生業(なりわい)の再生と、繰り返し津波に襲われる三陸ならではの安全な街づくりであった。9兆円を超える国の第3次補正など巨額の復興予算を手当していただいているが、省庁ごとの事業の縦割りや法的な縛りで、地元被災地では使いづらいものとなっており、メシの種と栖(すみか)の先行きは不透明なままである。

復興への各種委員会や地元団体との協議など、センター長の本務以外の業務(地域防災学を専門とす

る所長として、地域づくりに貢献することは、放送大学の役割のひとつと言えるかも…)にも走り回りながら気がかりに思うことは、被災地の窮状が忘れ去られつつあるあるのではないかとの危惧である。国会は政局絡みの混迷から抜け出せず、テレビはお笑いやグルメ番組のオンパレード、東北地方以外の方々にとって、震災は別世界のしかも過去の事象になってしまったようにも感じられる。

自然災害は地球の息吹きでもある。自然の中で生かされている私たちは、自然に対する畏怖と畏敬の念を改めて抱かねばならない。持続可能な日本の未来を考えるために、災害文化の醸成のために、放送大学に学ぶ学生さんには、観光ツアーでも結構です、ぜひ被災現地を訪れていただきたい。360度広がる光景、耳に聞こえる音、肌を感じる風、臭いはテレビの枠の中の映像とは全く異なる実態を感じさせてくれるはずです。

岩手学習センターで提供できる情報も多くあります。どうぞ、お問い合わせください。



更地のままの大槌町



結核予防会の ボランティアに参加して —想いを寄せるという支援—

臨床心理プログラム3期修了生
臨床心理士 名合 雅美

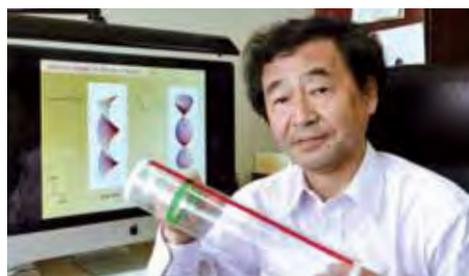


2011年6月19日から1週間、私は宮城県気仙沼市に結核予防会災害支援:救護班に参加して大阪から行く機会をいただきました。臨床心理学プログラムの小野けい子教授から修了生のメーリングリストを通してボランティア募集の案内をいただき、5月から7月初旬まで医師か看護師、事務員、臨床心理士の数名が1チームとなり、週交代で気仙沼小学校避難所へ、修了生からは私を含め4名(2期生:金谷、3期生:高橋・渡邊)が赴きました。主な活動内容は、健康相談、市販薬の配布、他の避難所訪問での健康チェック、心身に不調のある方の早期発見、地域の保健所等との連携でした。私が行った6月後半は、気仙沼は急に気温が上がり、津波にのまれた市街地は地盤沈下で水がひかないまま梅雨入りし、異臭と巨大なハエの大量発生で、衛生面への配慮や、食中毒・熱中症予防対策が主な課題となりました。被災地の方々はそれまで当たり前にあった日常を失い、深い傷を負われていましたが、先の見えないギリギリの状況の中で、その傷は心の奥深くにしまい込まれていました。「心のケア」と言っても私がしてきたのは、挨拶から始まる日常会話、言葉以外の表情やしぐさなどに心を寄せること、そして、心と体の不調に耳を澄まし、現地の空気を共に吸いながら、避難生活の中に共にいさせてもらうことでした。避難所の方々

は我々の訪問を笑顔で労ってさぐってくださいましたが、何気ない自然な語りの中からふいに飛び込んでくる目に見えない「おもい」の塊は、聴いている私の心を大きく揺さぶり、碇のように重く心の底に沈んでいきました。気温の変化などにより目に見える避難所の課題は刻々と変化していき、仮設住宅に入れるか否か、大事な方を失われた方と家族は無事だったという方等、目には見えにくい心境の格差も生じ始めていた時期で、「被災地の方々」と一括りにできない個別の「おもい」があちこちで浮上りつつありましたが、東北の方々は「自分よりも大変な方がいる」と、それを口に出される方はほとんどおられません。そして、想像するにその行き場を失った「おもい」と心の格差は、一年半経った現在、より大きくなっていると思います。時間と共に目に見える復興が進んでいくと、被災地から離れた人々は目に見えない傷への想像力を失いがちになります。そして、その想像力の欠如が、被災された方々の孤立感や無力感を深めます。私は気仙沼とそこで出会った方々から、「受け入れ難い現実を背負って生きる」ことのはかり知れない重みの一部をいただいて帰りました。今、私達にできることは、この重みと痛みを他人事ではないと心に刻み、「被災された方のことを想う」「犠牲となられた方のことを想う」「大切な人をあの日突然失われた方のことを想う」など、「思う」より「想う」を増やすことではないかと思えます。「想い」は「祈り」でもあります。笑顔で頑張っておられる方々の目に見える部分だけでなく、心の奥底に沈めておられる目に見えにくい「おもい」に「想い」を寄せることが、一年半経った今だからこそ何より大切なことなのではないかと私は思います。

研究と学び:果てしなき物理の旅路

本欄の執筆を依頼されたが時間がなく、通常のように学生さんからのコメントをいただくのは無理なので、まず、私自身のこれまでの研究について簡単に述べよう。専門は、理論物理学、特に素粒子論である。広範囲なこの分野のなかで、「力の統一」の問題や「量子重力」という最も基礎的な理論に関する研究を行って来た。「力の統一」とは、万有引力(重力)、そして、原子・分子、身の回りのすべての物質を作る電気磁気の力、さらにさかのぼり、原子核を作る力など、生命も含め、あらゆる自然現象を支配している「力」の起源を明らかにし、根本的な原理から統一して理解しようということだ。ニュートンからアインシュタイン、そして現代物理への流れの中で追求されてきた大問題だが、現在では「(超)弦理論」と呼ばれる考え方が大きな関心を呼んでいる。私とこの理論との関わりは、大学院生時代に弦の量子力学とアインシュタインの一般相対性理論との関係を最初に指摘した時から始まり、後々の研究まで尾を引き、



白色領域(両端)の間の力が弦の媒介によって生じる。閉じた輪の形をした弦(緑)が重力(一般相対性理論)に導く、開いた弦(赤)が電気磁力や核力の理論(ゲージ理論)に導く。

今日まで至っている。簡単に言うと、重力および電気磁気や原子核内の力が、弦を通じて融合統一した仕方で導ける(写真の説明参照)。しかし、残念ながらもまだ未完の理論だ。

放送大学に着任して2年と少し、自然科学を真剣に学ぼうと望む社会人の方々に、力足らずながらも、物理学の真髄を伝えたいという思いで日々すごしている。担当する大学院生、卒研究生のテーマは、電気自動車、列車事故分析、等の応用分野から、物理学の基礎的問題、と実に多岐にわたる。皆さんと一緒に学び、考え、議論するのが、新たな楽しみとなっている。

グローバルな視点で東アジア研究を

社会と産業コース・社会経営科学プログラムの西村研究室は、今年で5年目に入り、この間大学院生を中心とするゼミを開いてきました。全体のテーマは、国際関係論的視角から、東アジア・中国などの立ち位置とその内在的変容過程を、近100年ぐらいの歴史的奥行きをもって新たな資料に基づく新たな知見を発見し、再認識しようとするものです。

21世紀に生きる私達が、不確定性に満ちた東アジアやグローバルな国際環境の変容と変動のなかで、その歴史的基盤をどのようにとらえ、どのように今後を展望するのか実に多くの分析課題があります。

2012年3月までの学部を含めた修了生による諸論文のテーマには、国際関係から見た日本や中国・ベトナムなどの政治・経済史研究、日中関係史研究、現代中国のインターネット情報世界の研究、現代中国社会政策研究などが含まれ、そのうち2人の成果は『Open Forum』誌に掲載されました。ゼミでは修了生TA窪嶋誠氏の協力を得ています。

●学生の声● 私は既に文化情報学プログラムの課程を修了しました。修士論文「近代日中民間交流史」の研究過程では、中国黒龍江省社会科学院の研究者2人と交流を持ち、ハルピンに出向き実地調査し、京都の国際会議で再会したり、その後新潟にもお見えいただいたりと国際交流を実践するなかで、充実した研究生生活を送っています。もちろんゼミ後のコンパも楽しみの一つです。(石川 進、修士全科生1年)



ゼミでのさまざまな角度からの対話を通じた研究テーマの深掘りを通して、修士論文にまとめてゆく過程は、実に知的刺激に富んだものでした。また、現在の中国に関する分析や新たな知見をうかがえたのも大きな収穫でした。40歳代後半になって、学術的な視点からの中国に関する情報の整理と再構成ができたことは、中国とのビジネスを行う上でも非常に役立っています。(加藤 敬介、2011年度・修士課程修了)

2011
年度

放送大学叢書 感想文コンクール



放送大学叢書感想文コンクール実行委員長 大橋 理枝
人間と文化コース 准教授

放送大学叢書シリーズは、放送大学の授業科目の中で既に閉講になった科目の印刷教材の中から、テーマ性や時事性などを考慮して改めて読み直したいと思うものを委員会で選び、放送教材と共に学習するための「教科書」とは異なる「本」として著者の方に書き直して頂いているものです。そんな放送大学叢書の中の1冊を読んで、感想を文章にしたためて応募作品としてお送り頂いているのが、2010年度から開催されている『放送大学叢書感想文コンクール』です。2011年度には第2回を開催し、2011年9月30日に刊行された『学校と社会の現代史』までの16冊を対象図書として感想文の募集が行われました。



これらの本はいずれも、純粋に楽しみのために読む本というよりは読んで何事かを考えるように書かれている本だといって良いと思いますが、今回の応募作品もそのような本を読んだ感想文ならではの深い思索が表れているものばかりで、いずれも読み応えのある力作揃いでした。28名の方々から応募があり、募集の条件に合っていた26

件に対して審査を行い、最優秀賞1点、佳作2点を選びました。

以下、審査委員から出た評をもとにそれぞれの講評を記します。

最優秀賞：『自己をみつめる』を読んで 深川 良さん

「哲学的な思考が、淡々と、しかし、着実に展開されている」と評されました。ご自身が以前ヘルパーを勤められていた経験も踏まえながら、様々な観点から自分自身を見つめながらの思索が文章に表れており、読者としての審査員を引き込む文章でした。

佳作：「今を生きる」 河村 泰伯さん

「本書を指針としながら自分の人生に付いて思索しており、その緊張感が感じられる」と評されました。誰にでもやってくる「死」を考えることから自分自身に対する客観的な眼差しへと向けられていく思考の流れに沿った文章で、読みやすさ、分かりやすさが好評でした。

佳作：『学校と社会の現代史』を読んで ～テスト社会における不安と希望 濱野 美佐子さん

「テスト社会によって形式知だけが問われることの問題点を指摘し、暗黙知を具体的な人間の行為を通じて見せる教育の必要性を提言している」と評されました。ご自身の経験も踏まえて現代の社会に広まっている「知」の在り方に対して鋭い批判が述べられていました。

今回は受賞者と大学側の都合が合わず、本部で授賞式を行うことができなかったのが残念でした。今後も放送大学叢書がより多くの読者を得て、このコンクールが更に盛り上がることを願っています。

放送大学叢書について詳しくはホームページをご覧ください。
http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/sousyo/index.html

受賞者	タイトル
最優秀賞	
深川 良	『自己を見つめる』を読んで(対象図書『自己をみつめる』)
佳作	
河村 泰伯	「今を生きる」(対象図書『老いの心の十二章』)
濱野 美佐子	『学校と社会の現代史』を読んで～テスト社会における不安と希望(対象図書『学校と社会の現代史』)

「自己を見つめる」を 読んで



教養学部 人間の探究専攻 深川 良
福山サテライトスペース

私たちは、どのようなときにみずからの在り方を振り返るだろうか。みずからを振り返ろうとする理由は、本人

に現在する。不安や後悔、満足や感謝などの現在の自己を告げ知らせる否応なしの情動が、みずからの在り方に目を向けさせることになるだろう。

その振り返りは、現在の自己から発せられる過去の想起と将来への展望である。それは、現在を生きる自己の歴史性と、広い世界への可能性とを示す。将来へと歩む手探りの自己は、これまでの生において同じく将来であった過去、現在を手探りに生きてきたのである。振り返る自己はそのとき、みずからの「いま生きて在ること」へと向かい合うことになる。

このような日常生活の只中で生じる自己に対する、あるいは他者をも含む世界への「向かい合い」には、先達の導きは何よりの道標となろう。この『自己を見つめる』という一冊こそは、私たちにさまざまな角度から状況を捉えうる「視点の抽斗」を与える絶好の指南の書なのである。

私はこれまで、渡邊先生の多くの著書と訳書のうち幾冊かに接する機会があった。それらは、豊富な本文への注や文献的言及、訳書においては詳細な校訂注や解題などが充実し、学究的誠実さを読み手へ与えるに充分であった。しかし、本書ではそのような注は、一切付けられていないのである。それは著者自身によると、「煩瑣にわたる文献的な討論は当面差し控えて、もっぱら私なりの問題考察を提示してみることに主眼を置いた」からなのだが、そのことで本書の価値が減じることはない。暖かい語り掛けに満ちながらも、本文の内容は一読して理解し尽くせるようなものではなく、考える営みに溢れているからである。おそらくそこには、注に煩わされず自己への問いかけに邁進して欲しい、という著者の願いが込められてもいよう。

日常に潜む人生への問いは、日常性ゆえに私たちを問題意識から遠ざけるが、折に触れて本書を開くことで、みずからのそのときの在り方を逆に知らされることだろう。ただし幾度もの繙読によってこそ、本書はその真価を発揮するのである。

本書は十五の章で成っている。最初から読んで、読み手の興味のある箇所から読んでその魅力が失われることはない。しかし、各章は周到に配置されているように見受け

られる。「自己」の章を軸として、前半は自己の「これまで」への省察、後半は「いま」と「これから」に対する考察、というシンメトリーを構成しているからである。自己の履歴、自己の自己自身への関係、その関係への関係という人間独自の在り方、世界と自己との関係、将来の自己。これらについて丁寧に、ときに熱を帯びて語られていく。

終わりの二章は、「老い」と「死」である。それらは、完成を目指す自己にとっての最終到達の位相にあり、それらの充実こそ自己の完成に最も近づく。カントが人生の最後に「これでよい」と述べたように、おのれの人生に満足と感謝とを覚えて天寿を全うすることは、私たちが切に願うことであろう。

しかし、紆余曲折ありながらも平穏な人生を送る、ということの有り難さを突きつける出来事を私たちは身近に知った。予測の難しい大災害は、抱いていた将来への展望を無化してしまう。災害の犠牲者の人生は前触れなく終わり、遺族や被災者は不可抗力とはいえ、日常を喪失させられ、癒えることのない痛手を負った。また、直接に被災しなかった私自身も、将来の不可知性や他者の痛みへの無理解、図らずも無関心の世間を担っているその在り方に愕然とさせられたのだった。

もし実際に、そのような大災害に遭遇したら、私はどのように感じ、行動するだろうか。それは想像を絶する状況だが、おそらくその「いま」においては、これまで生きてきた私の全てが表れることになるだろう。十分な判断の時間の確保や周到な準備が不可能な状況では、おのれの履歴が粉飾なく露わになるはずなのである。不幸にも災害で命を落とした人々も、その死の直前の切迫した、あるいはその瞬間まで日常であったそのとき、そこにそれぞれの履歴としての生き様が現象したであろうことを私は疑わない。

それは次の事柄を雄弁に語っている。すなわち、現在の生には絶えず死が寄り添っていること、いかなる状況であっても現在は過去の生の集大成として現象すること、したがって過去のかけがえのなさとともに、その履歴へと沈没していくこの現在もかけがえがないということ、これらである。

現在の判断や行為は、自己の存在を反省する暇なく、端的に自己を現象させる。到来する現在では、不可知の将来を迎えるにあたって自己を投げ出すほかはない。過去に根差す因果と予測への信憑を抱きつつも、死を筆頭とするあらゆる可能性を超えた可能性のうちに現在する自己は、一所懸命の自己である。将来が現在するとき、私たちは自分がどのように行動するかは制御できるようでいて、実は自分でもわからないのである。(後略)

この作品の全文はホームページに掲載しています。
http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/sousyo/osirase/20120305.html

初歩からの数学('12)

放送大学教授
(自然と環境) 隈部 正博



隈部 正博 教授

数学は嫌いだけど、楽しかった思い出はあると言われます。いち、にーい、さーん、、、いつまでも数えました。にいちがに、ににんがし、にさんがろく、、、。計算問題を解いて楽しい。数学にはリズムがあり、人間の心と体に心地良さを与えました。それがいつの間にか嫌いな科目になったのです。文字通り数学を初歩から勉強しましょう。足し算引き算かけ算から始め演算規則を勉強します(易しすぎですか)。では負の数どうしの積がなぜ正の数になるのでしょうか。小説家スタンダールは

(正の数を貯金、負の数を借金として)借金と借金をかけ算して貯金になる、そんな馬鹿げたことがあっていいのか、と書いてます。長い間人々を悩ませました。しかしこの問題は、皆さんが当たり前と思っている事を組み合わせるのです。つまり数学とは基本原理(原則)から出発して、一つ一つ、人間の手で作られるのです。印刷教材では紙面の許す限り一步一步進みます。「初歩からの数学」されど「初歩からの数学」です。

発音をめぐる冒険('12)

放送大学准教授
(人間と文化) 井口 篤

作家・俳優・翻訳家
(放送大学客員教授)

ステュウット・ヴァーナム-アットキン



井口 篤 准教授



ステュウット・ヴァーナム-アットキン 教授

みなさんは英語の 'hall' と 'hole' を正しく区別して発音できますか? 両方とも、日本語で表記すると「ホール」となり、まったく同じになってしまいますね。しかし、これら二つの単語がもつ母音はまったく異なっています(二つ目の単語に含まれる母音は、「二重母音」なので「ホウル」と発音されなければなりません)。この講義においては、私たち日本人が間違えやすい英語の発音について丁寧に解説を加え、受講者の皆さんに練習する機会を提供します。

しかし同時に、本講義は「正しい英語発音など存在

しない」という

ことをモットーにしています。確かに、他人に理解してもらうためには「はっきりと」「分かりやすく」話す必要がありますが、他方で英語は現在世界中で使われており、音声面での多様性には目を見張るものがあります。そのため、「発音をめぐる冒険」ではイギリス英語を一応のモデルとしつつも、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ハワイ、南アフリカ、アイルランド、スリランカなど、様々な英語発音をご紹介します。みなさんも私たちと共に英語の発音をめぐる冒険に旅立ちましょう!

心理学概論 ('12)

放送大学准教授
(心理と教育) 星 薫

放送大学准教授
(心理と教育) 森 津 太 子



星 薫 准教授



森 津 太 子 准教授

これまで開講されていた「心理学入門('06)」に替わって、この4月から新しく「心理学概論('12)」が開講されました。今回は私(星)と、森津太子先生の2人で主任講師を務めています。またもや私が作成した訳ですので、前回とそれほど違う内容のものが作れる訳ではないのですが、今回は、生活に密着した3つのテーマを立て、そのテーマを巡る心理学的な話題を毎回ご紹介していくという方法を取りました。3つのテーマとは「教育」

「犯罪」「産業」

で、どなたにとっても比較的なじみがあるのではと思います。これらのテーマを選びました。生活との関連ということ強調するために、「まなみさん」という架空の放送大学生とその1家にイラストで登場してもらい、その生活をのぞかせてもらいました。また、毎回それぞれの話題について、専門家の研究室をお訪ねし、お話を伺っていますので、是非、放送教材も忘れずに学習して下さい。

生活経済学（'12）

岐阜大学教授 大藪 千穂
(放送大学客員教授)



大藪千穂教授

本書は、お金を中心としながらも、生活のあり方を問うています。今後、私たちがどのようなライフスタイルを選択すればよいかを考えるきっかけになれば幸いです。

まず生活とお金の関係を歴史から考え、次に生活でのお金の動きを、家計のしくみや法則から学びます。そして単身世帯、共働き世帯、母子世帯、高齢者世帯等、異なったタイプの世帯の家計について勉強します。また、近年話題となっている社会保障制度と消費者問題について取り上げています。さらにお金以外

で生活に必要な時間、エネルギーと環境問題にも注目しました。最後には、現代を生きながら、現代社会とはまったく異なったライフスタイルを保持、実践しているアーミッシュ(Amish)の人々のライフスタイルを紹介しています。今後、どのような生活をすればよいのか、幸せとは何かを問う時、遠く離れたアーミッシュの人々の生活から何かを学ぶことができるのではないかと思います。

政治学入門（'12）

筑波大学大学院教授 辻中 豊
(放送大学客員教授)



辻中豊教授

政治は人間社会とともにあるとはいえ、21世紀には一層、その役割が重要となっています。政治が公的決定として、強制力と正統性をもって人々の生活を規定するからであり、とりわけ現代政治が、大衆社会と多層的なガバナンスという条件のもとで、国内外ともに極めて複雑な相互作用を呈するからです。日本政治も、連立政権と政権交代の時代に移行し、内外から押し寄せる多くの問題処理に悩み混迷する中、2011年には未曾有の東日本大震災が発生、公的決定の在り方、政治の体

制自体が問われることになりました。

本書は、市民の立場から公的決定の理解を目指して、政治システムと公的決定、政治体制、民主主義、国家制度、規範といった構造、主体として有権者とマスメディア、社会集団、議員と政党、首相と大統領、官僚制と裁判所をとりあげ、最後に日本を素材に政治過程を歴史的に振り返ります。本書を通じて、現代政治の仕組み、公的決定の性格と市民参加への意義づけを理解していただけることを願っています。

学校と法（'12）

日本女子大学教授 坂田 仰
(放送大学客員教授)



坂田仰教授

学校現場では、「学校教育の成否は、教師と児童・生徒、保護者の信頼関係で決まる」とよく言われます。だが、かつては「あるのが当たり前」と思われていたこの信頼関係が、価値観が多様化する中で、大きく揺らぎ始めています。教師が発する「子どもの幸せのために」という情緒的な言葉に誰もが納得した時代は過去のものとなり、自らの価値観に照らして教育活動を評価し、冷静に教師との関係性を考える人々が増加しているのです。連日のようにマスメディアを賑わす学

校教育紛争は、その査証といえるでしょう。そこで、講義では、3名の講師が分担し、ゲストスピーカーも交えて、体罰、学校事故といった身近なテーマから、義務教育の存在意義を巡る対立まで、学校現場で生じている多様な“紛争”を法的観点から分析していきます。日頃あまり考えることのない権利と義務という角度から学校教育を俯瞰することによって、新たな地平を見つけて頂ければ幸いです。

家庭教育論 ('12)

放送大学教授
(心理と教育) 住田 正樹



住田 正樹 教授

家族は、いうまでもなく子どもの発達にとって最も基礎的、かつ重要な集団です。子どもは全く無力な存在として生まれてきますので家族の庇護や助力なしに生きていくことはできません。家族の庇護や助力を前提にして子どもは生きているのです。しかしその無力な存在として家族の庇護や助力を受けている間に子どもは家族によって発達の方向も内容も性質も決定され、さらにその延長線上の方向に将来の方向性をも決定されていきます。子どもの発達にとって家族は決定的な

意義を有しているのです。しかも子どもは家族を選ぶことはできません。子どもにとって家族は運命的な集団なのです。

この講義では、家庭教育を家族集団のなかでの子どもの発達に関わる事象と広義に捉え、子どもの発達過程の問題を中心に親の問題や家族の問題をも取り上げて考察しています。この講義を機に広く子どもの問題や家族の問題に対する理解と関心を深めていただければと思っています。

都市社会の社会学 ('12)

放送大学教授
(社会と産業) 森岡 清志



森岡 清志 教授

この科目は社会学の中の専門分野の一つ、都市社会学を対象にして、その入門的な解説を行う科目です。都市社会学の主要なテーマは、都市という居住地の特質が、人間の行動、関係のつくり方、意識などに、どのような影響を与えているのか、この点を明らかにすることです。そのため都市という居住地自体の変化を捉えるとともに、この変化と人びとの行動の変化との関連を捉えることが重要になります。科目では、まず都市社会学の基本的な概念や考え方について説明し、つ

いで近代以降の日本の都市の歴史の変容過程を明らかにしてゆきます。また、社会地図を用いて東京圏の変容過程をわかりやすく示し、その上で月島地区を取り上げ「もんじゃ」と地域住民とのつながりの変化を具体的に説明します。さらに現代日本の都市社会における不平等をテーマに、エスニシティや貧困などの問題を取り上げます。興味深い話題を豊富に散りばめてありますので、たくさんの方に面白く聴講していただけるのではないかと思います。

現代南アジアの政治 ('12)

京都大学大学院特任教授
(放送大学客員教授) 堀本 武功 放送大学客員准教授 三輪 博樹



堀本 武功 教授



三輪 博樹 准教授

今年度から新講座「現代南アジアの政治」がスタートしました。この講座の大きな狙いは、受講すれば、現在の南アジア政治が分かるようになるという点です。南アジアと言っても8カ国ある国々全部をカバーできませんので、インドが中心ですが、パキスタン、スリランカ、バングラデシュなどの国々や日本との関係も取り上げます。

インドは、南アジア地域の中で、人口7割、面積6割、GDP(国内総生産)8割を占める「地域の超大国」です。インドは、1991年から本格化した経済自由化によって目覚ましい経済成長を遂げ、今や、世界で中国ととも

に注目を集める国になっています。インドについては、新聞・雑誌・テレビでも頻繁に取り上げられるようになっていますが、全体的に見ると、経済が中心です。そこで、本講座では、政治を重点的に取り上げます。

本講座では、新進気鋭の日本人研究者が熱心に南アジア政治を講義します。受講者がこれから大きく飛躍しようとしているインドや南アジアについて理解を深めることを期待しています。

ファイナンス入門 ('12)

放送大学准教授 (社会と産業) 齋藤 正章

高崎経済大学教授 (放送大学客員教授) 阿部 圭司



齋藤 正章 准教授 (右) と
阿部 圭司 教授 (左)

皆さんは、ファイナンスと聞いてどんなことを思い浮かべるでしょうか。ファイナンスは主体別に分類すると、個人(家計)のファイナンス、企業のファイナンス、国や自治体のファイナンスがあります。本講義では、企業のファイナンスを対象としています。

この企業のファイナンスは、実は私たちの生活に密接に関わっています。例えば、悪い例ですが、最近では大切な年金資金を運用する会社が、その運用に失敗し、多くの人を不安にさせています。なぜこのような事件が生じてしまったのでしょうか。リスクを回避する

手段にはどういものがあって、どの対策が講じられるべきだったのでしょうか。これらの問いかけに答えられるように、本講義では、企業のファイナンスを解き明かします。

新聞等の経済記事を理解し、経済社会でよりよく生きていくためには、教養としてのファイナンスの知識が欠かせないと講師陣は信じております。たくさんの方の受講をお待ちしております。

デジタル情報の処理と認識 ('12)

放送大学准教授 (ICT活用・遠隔教育センター) 柳沼 良知

放送大学准教授 (ICT活用・遠隔教育センター) 鈴木 一史



柳沼 良知 准教授



鈴木 一史 准教授

コンピュータは、計算する機械である一方で、文字、画像、音声、映像といった情報も扱うことができます。しかし、これらがどのように扱われているかは、外からは見えにくいのが現状です。このため、本講義では、文字、画像、音声、映像といった情報の処理がコンピュータ上でどのように行なわれているかについて概説します。具体的には、1章から3章では、話し言葉等の認識を行う音声認識について述べるとともに、4章から6章では、コンピュータ上で文書データがどのように処

理、認識されるかについて述べます。また、7章から15章では、画像の表現や、図形や写真の認識を行う画像認識がどのように行われるかについて述べます。本講義により、通常は、外から見えにくい、コンピュータ上の文字、画像、音声、映像といった情報の処理や認識について、より具体的なイメージを持てるようになることを期待します。

ネットワークとサービス ('12)

放送大学教授 (ICT活用・遠隔教育センター) 近藤 喜美夫

放送大学准教授 (ICT活用・遠隔教育センター) 葉田 善章



近藤 喜美夫 教授



葉田 善章 准教授

パソコン、携帯電話を初めとして、コンピュータと通信技術の進歩にはめざましいものがあります。このような進歩のおかげで私たちの生活は効率的で快適なものになっています。コンピュータなどの機器やシステムがネットワークを介して互いに連携する状態は「ネットワークコンピューティング」とも呼ばれますが、様々な工夫や、技術が組み合わせられ、社会の広い範囲で大きな影響を与えています。このような「ネットワーク」と「コンピュータ」の働きに関して学ぶことは、先人たちの情

熱と努力の対象を理解することであり、提供されるサービスを効果的に展開したり、ネットワーク社会をより深く理解するための基礎となるでしょう。この授業では、インターネットでのサービス実現の仕組みや利用の方法についてその基礎を理解することを目標として、信号の伝送法、プロトコルなどネットワークの技術や考え方、また、ネットワーク構築やサービス実現の方法、利用方法に関して一緒に学んでいきます。

東京渋谷学習センターオープン

渋谷学習センターの概要

渋谷学習センターは世田谷学習センターの閉所にもなって計画され、本年4月に開設、去る4月2日には、白井理事長、岡部学長臨席のもと、内外の多くの方々にご出席頂き、オープニングセレモニーがとどこおりなく執り行われました。また、4月8日には200人を超える学生が出席し、入学式を挙行致しました。



オープニングセレモニーの様子

世田谷学習センターの閉所という困難を乗り越え、無事渋谷学習センターを開設できたことは、職員 の努力とともに、関係各位のご支援・ご協力の賜物と、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

渋谷学習センターは渋谷駅近くの五島育英会ビル1階（徒歩5分程度）という至便の場所に立地しています。センター内には、手狭ですが事務室、講義室、図書・視聴覚学習



渋谷学習センターエントランス

室、ゼミ等も可能な会議室、学生間および学生一教職員間でのコミュニケーションの為のスペースがあります。図書館はありませんが、本センターからネットワークを介して本部図書館の書籍を利用することができ、また旧世田谷学習センター図書館所蔵の図書（本部図書館で管理）は渋谷学習センターに所属する学生が優先的に使用できるようになっています。

面接授業は渋谷の利便性を生かして、7時30分か

ら8時55分までの早朝講義、および18時から21時の夜間講義も行われており、通勤前後の時間帯を利用した多くの学生に利用されています。さらに、土日には近くの東急プラザビル内の商用会議室（AP渋谷）、五島育英会ビル地下の講義室を利用した講義が開設され、多くの学生で賑わっております。

平成24年度第1学期のセンター所属学生数は4000人を超え、渋谷学習センターを利用したいと望む学生が多いことを示しております。

渋谷学習センターの今後

我が国は少子高齢化社会を迎え、若い学生の教育とともに、社会で活躍している人々、更には仕事から一度は引退した人々に対する生涯学習の推進が一つの課題となっています。これらの人々は勉強意欲が高いため、各自が従来から持っている専門領域だけではなく、新しい領域の教育を受けることにより、1人ひとりの人間力が大幅に向上する可能性があります。また、シニアの方々が仕事だけではなく、多方面での経験、能力を生かし生涯現役として社会にご貢献いただくこと、更には現在社会で活躍している人々の個々の能力を向上させ、強い人間力を形成することが、我が国が今後の世界で生き残っていくために必要なのではないのでしょうか。

幸い渋谷はIT産業、アパレル産業を始め、我が国の多様な新しい産業が起業される街であるとともに、多くの鉄道のターミナル駅であるため、毎日仕事に通う通勤客の多い街でもあります。この立地を生かして、向上意欲の強い方々に、勉強の機会を提供することこそが、放送大学、とりわけ渋谷学習センターに課せられた使命と考え、教職員一同努力していく所存です。

東京渋谷学習センター

東京都渋谷区道玄坂1丁目10番7号 五島育英会ビル1階 〒150-0043
JR渋谷駅下車 徒歩約5分 電話:03-5428-3011



視聴覚学習室

学生サポートセンターを ご活用ください

学生の皆さんの中には放送大学総合受付(043-276-5111〈音声ガイダンスで①②番を選択〉)へ電話でお問い合わせをされた方がいらっしゃると思います。また、入学関係の資料を受け取られた後「資料をお読みいただき何かご不明の点はございませんか?」や、入学された後「学習は順調ですか?」、「学ばれる上で何かお困りのことはありませんか?」、「このところ科目登録をされていないようですが、来学期のご予定は?」などの電話を受けられ、修学上の疑問が解決し学びの意欲が高まったという経験をお持ちの方はいらっしゃいませんか。

これらのお電話を受けたり架けたりしているのが千葉市の大学本部内にある「学生サポートセンター」です。学生サポートセンターは、「対話による学生への学びの支援」を行い、「学生の声を放送大学運営に反映」させることが主な役割で、2010年5月に創設され今年3年目を迎えています。本年6月現在総勢55名の体制でサポート業務を行っています。



総合受付への照会・相談の電話は年間約7万4千件以上。単位認定試験前や入学受付・科目登録期間など繁忙時には電話が繋がりにくいなどご指摘を受けることもありますが、スタッフ一同迅速・的確なご案内に努めていますのでご理解をお願いします。

また、修学上のポイントとなるタイミング(通信指導提出前・単位認定試験前・科目登録期間中など)では、学生の皆さんにサポートコールを行っています。「忘れていた!」とか「電話をもらってまたやる気が出てきた」などのお声をいただいています。

学習センターでのFace To Face、学生サポートセンターでのVoice To Voiceの双方向のコミュニケーションで学生の皆さんの学びをサポートして参りますので、よろしくお願い致します。

入学料改定のお知らせ

放送大学では、このたび平成25(2013)年度から、新たに教養学部情報コース、大学院情報学プログラムを設置することとしておりますが、一方で国の厳しい財政状況を受けて運営費補助金が削減されております。

本学では、できる限り学生負担のないよう、入学料を平成17年度以来据え置いてまいりましたが、今回の新コース・プログラム設置に対応した入学者の受け入れのための諸準備、また、今後の修学環境の整備、学生サービスの維持向上に対応するため、やむを得ず、平成25年度第1学期入学者から入学料を改定することといたしました。何卒、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

詳しくは放送大学ホームページ、学生募集要項をご覧ください。

ホームページ

http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/2012/240606.html

平成25年度第1学期入学者からの改定額

学部	現在の入学料	平成25年度入学料
全科履修生	22,000円 ▶	24,000円
選科履修生	8,000円 ▶	9,000円
科目履修生	6,000円 ▶	7,000円
大学院	現在の入学料	平成25年度入学料
修士全科生	44,000円 ▶	48,000円
修士選科生	16,000円 ▶	18,000円
修士科目生	12,000円 ▶	14,000円

※再入学者及び集団入学者については、改定後の入学料から、再入学者は25%割引、集団入学者は50%割引されます。



「名誉教授称号授与式」を挙

総務課

6月20日(水)学長室において、3月に退任された本間博文前教授に対し、岡部学長より放送大学名誉教授の称号を授与しました。今回の称号授与により、平成14年に名誉教授称号の制度ができてから放送大学名誉教授の称号を授与された方々は22名になりました。



(前列左から)岡部学長、本間名誉教授
(後列左から)二宮副学長、吉田副学長、松村附属図書館長、來生副学長、川合ICT活用・遠隔教育センター長



学生メール (Gmail) をご活用ください

教務課・情報推進課

WEBブラウザを利用したメールで、学生全員にメールアドレスが割り振られております。大学からのお知らせなどを送信していますので、ぜひご利用ください。キャンパス・ネットワーク・ホームページやシステムWAKABAからリンクがありますので、簡単にログインできます。

※学籍がなくなると使用できなくなりますので、ご注意ください。



放送大学エッセイコンテスト2012年度作品の募集

学習センター支援室

第5回放送大学エッセイコンテスト2012年度作品を募集しております。多くの方の応募をお待ちしております。

テーマ	「放送大学での学びから得たこと」	
応募資格	放送大学の全学生(過去に最優秀、優秀賞として入選した学生を除く)	
応募内容等	①エッセイは、2000字以内。日本語で書かれたもの(未発表のものに限り)※ワープロ、手書きなど読み易い文字で作成してください。 ②エッセイ本文のほか、タイトル、氏名、学籍、所属(コースまたは専攻)、学生種、所属学習センター、連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)を記入してください。なお、電子ファイルがある場合はできるだけメールでご提出ください。 ③応募数は、1人1編に限り。また、応募作品は、返却いたしません。 ④作品は、放送大学の教育や普及啓発の目的のため使用させていただきます。	
提出先・問合せ先	放送大学学務部学習センター支援室 エッセイコンテスト担当 (essay-contest@ouj.ac.jp)	
提出方法	キャンパスネット内の告知版「エッセイコンテスト」から投稿または郵送	
提出期限	2012年10月14日(日) 消印有効	
選考・発表	選考委員会で選考のうえ、入選者には2013年2月中旬にお知らせします。	
入選作品	最優秀1点、優秀3点、佳作6点 ※入選者には、賞状及び副賞を授与いたします。また入選作品は、ホームページ、ONAIR等に掲載の予定です。	

編集後記

今回のオン・エアには、この3か月間のトピックや、「コース別座談会」「東北リポート」「科目紹介」のような継続性のあるテーマ記事とともに、未来への構想を具体化する「アクション・プラン2012」や、これまでの講義を記録・保管する「アーカイブス」の記事などがあります。過去から未来に続く放送大学の全体像を、ありありと心に描くよすがとしていただければ、幸いです。

さて、今年は『方丈記』800年の節目の年です。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」という書き出しは、絶えることのない日々の新しさの象徴のようにも思えます。持続的に学ぶことこそが、新たな人生の広がりや潤いをもたらすのではないのでしょうか。(島内裕子)

放送大学通信 オン・エア 編集委員(2012年度)

委員長	教授	島内 裕子	
副委員長	教授	高木 保興	
委員	副学長	吉田 光男	
	教授	井上 洋士	
	教授	米谷 民明	
	准教授	岡崎 友典	
	准教授	秋光 淳生	
	准教授	柳沼 良知	
編集事務担当		総務部広報課	



http://www.ouj.ac.jp/ ISSN 1343-3369

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp